

次にこれらの遺跡群はそれぞれA群=伊河上荘、B群=田中荘・平野荘、C群=櫛谷荘・玉造保、D群=伊河下荘、E群=黒田荘・堅田荘・押部荘、F群=神出荘（保）の荘域を含んでいることを確認する^⑤。D群については荘園データベースでは確認できないが、文献資料で12世紀前半に明石郷・12世紀後半には伊川谷荘となるという変遷が指摘されている^⑥。またE群は堅田荘・黒田荘なども程近い。これら荘園の成立経緯や立荘年代などはさまざまと思われるが、F群以外の遺跡群それぞれの核となる位置に中世顯密仏教寺院が位置していることからも、各荘園遺跡と寺院との間に密接なかかわりが存在することは容易に想像できる。

次に各寺院の創建年代と周辺地域の開発に関する考古学的検討を行おう。縁起にみる創建年代と実際の年代とにある程度開きがあるのは当然だが、考古学調査によって上記六寺のうち、実際の創建年代に迫りうるのはA群=太山寺（12世紀初頭）、太谷寺（室町時代後期）、B群=日輪寺（12世紀初頭）、C群=如意寺（12世紀初頭）の四寺である。E群=性海寺は文献的に見て12世紀中と考えられる。このうちA群の太山寺は明石川流域天台寺院の頂点に位置し、太谷寺はその末寺の一つとして抱えられていたとされる。太山寺自ら荘園領主として中世に権勢を誇ったことは広く知られているが、今日までに発掘調査で確認されているのは坊院および鎌倉時代周辺集落の一部である^⑦。その調査で平安時代後期の瓦が出土していることや、法界寺型の伽藍配置、阿弥陀堂の年代から見て、創建年代は12世紀初頭までは確実に遡ると指摘されている^⑧。一方太山寺と本末関係にあったとされている太谷寺についてはほぼ全山が調査され、伽藍配置等も明らかになっているが、その遺構の示す年代は室町時代後期であり、太山寺その他より大きく下る。この山林寺院については日輪寺同様戦乱による彷徨を余儀なくされた縁起・伝承が残されており、幾度か寺域が大きく移動していると推測されているが、今日我々が遺跡として知るのは、室町時代当時の姿である^⑨。

B群の日輪寺については、今回の調査で考古学的に遡りうる創建年代の上限は12世紀初頭であると判明した。また日輪寺の所在する段丘麓にある二ツ屋遺跡では12世紀末の富裕層の屋敷地が確認されており^⑩、玉津田中遺跡では11世紀中ごろから13世紀初頭までの間に集落内に多数の建物が建てられたことがわかっている。特に辻ヶ内地区で確認された居館遺構の年代は12世紀第4四半期とされ、神出古窯址群、明石市三本松瓦窯出土の瓦と同系の瓦を多量に出土している^⑪。これらは日輪寺周辺に所在する荘園の在地領主的な人物の居館と見られるが、次節に記すように、日輪寺とも浅からぬ関係に（特に二ツ屋遺跡の主は）あったと推測される。

C群の如意寺については伽藍、子院など、比較的具体的な寺域像が判明している^⑫。出土瓦の最も古相を示すものから見て、12世紀初頭まで遡る創建と考えられるが、その如意寺近在では、櫛谷川の対岸に位置する菅野遺跡で、12世紀後半の大型建物など、11世紀後半から12世紀後半にかけての荘園遺跡と目される掘立柱建物群が確認されている^⑬。

D群の白水遺跡では、12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物群と条里遺構が発見されており、12世紀後半に成立した伊川谷荘内の農村風景であると考えられており^⑭、8世紀末に創建され中世まで継続した推定「延命寺」とされる寺院関連遺構も確認されている。特に11世紀前半に梵鐘を鋳造するために使われた遺構が発見され、この廃寺の盛期を示している^⑮。

なお遺跡から出土した11世紀前半の瓦は神出古窯址群万堀池1号窯と同文とされる。

その他D群内には明石郡衙推定地を含む吉田南遺跡を中心に、新方遺跡、上池遺跡など平安時代から室町時代まで続く広大な遺跡群を形成しているが、これらの遺跡からは官衙関連の遺構・遺物などが多く発見されており、また明石市域の太寺廃寺や天平年間から開発の進んでいた住吉保も近く、他の遺跡群より先行して中世以前から開発の進んだ地帯であるとわかる。そういった点からみれば、D群内の推定「延命寺」が他の明石川流域の寺院群よりぬきんでて古い創建年代を示すこととも整合性がある。

E群の性海寺・近江寺については考古学的に創建年代を確定するだけの調査履歴が存在しないが、最古の性海寺文書が12世紀末であることから、それ以前の創建であることは確実である。E群は周辺集落の調査例も比較的少ない。

以上のように、D群以外では、現存する六寺中三寺が考古学的に12世紀初頭に創建年代を求めることができ、一寺は文献的に12世紀中である。そしてこれらの創建年代と周辺集落遺跡の動態とはほぼ軌を一にしていることがわかる（太谷寺に関しては太山寺と本末関係にあったこと、室町以前の情報がない事から考察から除外し、資料の蓄積を待ちたいと思う）。

現時点で判明している中世寺院と周辺集落の動態をみると、明石川流域における仏教寺院の展開は、以下のように推測される。

古代において、明石川と櫛谷川の合流地点付近の肥沃な地帯であるD群が他に先行して開発される中で、まず太寺廃寺が創建された。ついで推定「延命寺」がおなじくD群内に誕生する。これらは言わば明石川流域の古代開発期の寺院である。その後、古代末から中世のある時期に集落が急増することが遺跡数の増加からわかるが、原動力となったのは荘園開発の進展である。11世紀から急増する集落遺跡の分布は、古代に明石川と櫛谷川の合流点を基点とした土地開発が川沿いに北進し、やがて11世紀終わり頃には、神出保まで達したことを告げている。ただし黒田荘に関して平安時代以前に殿下渡領の記録があることからも⁽¹⁶⁾、開発は直線的な進行ではなく、小さな点が大きな円になるように、面的な拡散であったと考えられる。

荘園開発の進行は、古代社会解体の促進であり、人口増加・地勢力の上昇といった中世化のプロセスでもある。中世化する社会の中で、顯密仏教は古代的教義からの脱却と民衆教化へ転換を図り、社会に浸透していく。そして荘園開発による地勢力の上昇と顯密仏教の民衆教化路線とが結びついたとき、日輪寺ほか明石川流域に數々な中世寺院群が生み出されていく。換言すれば古代から連綿と開発の続いた明石川流域の社会において、これらの寺院を受け止めるまでに中世的社会が成熟を見たのが、12世紀初頭頃だったとも言えるのではないだろうか。明石川流域の荘園社会が蓄えた富は、多くの顯密寺院を村落内に生み出したのである。

「11・12世紀の交を境として、急激に」こういった人々の視野の中にある寺院が増え始める、と野地は指摘する。かつての僧侶のための山上の修行寺から、民衆教化のための山下の寺に、天台宗そのものが変化した現れであると。そしてこの変革を促した背景として、末法思想、社会不安といった当時の社会情勢を指摘し、「村落との直接的関連のなかで営まれる山下の寺々が、つま

り平安末の主流」であるとする。野地の指摘は、明石川流域においてはまことに適切なものであることを、今まで積み重ねられた発掘調査が実証している。30数年前の論考でありながら、今なおその慧眼に深い感銘を覚えずにはいられない。

そしてこれら顕密仏教寺院群は、太山寺を頂点に一元的なネットワークで結ばれていたものではない。数ある顕密仏教寺院の間には、重層的かつ流動的な関係性が結ばれていたであろうことは、太山寺文書にみる太山寺と如意寺の関係からも容易に推測できる⁽¹⁷⁾。今後は文献史学の成果とともにあわせて、個々の寺院のさらなる具体像や、互いの関係性、明石川流域における顕密仏教寺院ネットワークの実態の解明などが、この地域の中世社会へアプローチしていく上で重要な課題として浮かび上がってくるものと思われる。

4. 日輪寺所用の瓦、および土器・陶磁器 - 結語にかえて -

ふたたび本調査の出土遺物に立ち戻って、中世の日輪寺とそれを取り巻く社会について考えてみよう。

今回の調査で出土した遺物のうち瓦については、現時点ではすべて12世紀初頭とその周辺の時期のものであると考えている（瓦の年代観については、丹治康明の神出古窯址群における編年に沿っている）。その中で最も明確に年代の判る瓦当文様について検討しよう。

瓦当文様の検討にあたっては、多用されがちな「同文」「同范」「同系」といった用語に混乱が認められる例が多くあることから、これらの定義をまず明確にする。基本的にこれらの概念規定は上原真人のそれに掲っている⁽¹⁸⁾。上原は瓦当文様の差異について①「近似意匠」②「同一意匠」③「同文異范」④「同文」⑤「同一文様系譜」などの概念を規定している。

いわゆる「同范」については、実際范傷など確實に認定できる証拠が偶然存在しうる場合のみ認められるもので、その可能性はかなり低い。仮に同一の范本を用いていても、范傷の生じた時期に前後して製作されれば、もはや互いの同范性は確認不可能なのである。そういう意味では、大量かつ一括して製作されたものの出土例でもなければ、同范関係の認定は非常に困難を極める。これに対して上原は意匠としてほぼ等しいものを「近似意匠」とよび、さらに細部の構成まで等しくなれば「同一意匠」とした。つぎに近似意匠互いの中にある種の普遍性が求められ、型式変化を辿っていけるものは「同一文様系譜」であり、意匠に共通性があるもの同士でも原型を決めがたく存在の同時性が想定される場合は「同文」とし、特に範が異なることが明確な場合は「同文異范」であるとする。

「同文」の場合両者の時間的差異は明確でなく「同一系譜」（以下同系とする）の場合は両に祖型と進化型の時間軸が存在する。同文、近似意匠、同一意匠の表現は同一系譜に包括されるが、同文、同一（近似）意匠は比較的広義な表現で、同范の場合は狭義である。

以上の規定を踏まえ、第7次調査も含め、日輪寺遺跡で出土した瓦当を見てみよう。

日輪寺遺跡で出土した10点の瓦当のうち、軒丸瓦は4点、軒平瓦は6点である。軒丸瓦のうち本調査資料1と第7次資料560は同一意匠であり、生産地での出土例としては神出古窯址群堂ノ前支群と、田井裏支群出土資料⁽¹⁹⁾、三木市平井窯跡群出土資料⁽²⁰⁾とに、それぞれ近似、同文の資

料を求める⁽²¹⁾。また同時に尊勝寺出土資料9とも同文あるいは近似関係を認めうる。これらは日輪寺資料と神出資料では蓮子の構成が8+1、尊勝寺資料と三本市平井窯跡群資料には6+1という違いがあるほか、蓮弁が方形に近いバランスの前者に比して、後者は縦長であるという違いも認められる。

その他神出資料には囲線が二重のものと一重のものとが存在する。尊勝資料については報告書および上原の文献に指摘がすでに存在するように、その产地を東播系古窯群に求めうるが、神出資料より三本市平井窯跡群資料のほうが、より類似性が高いといえる。

一方26の資料については、やはり同じ複弁蓮華文系ではあるが、蓮弁の表現、囲線の省略など表現の著しい簡略化と粗雑さが見られ、神出古窯址群堂ノ前支群と田井裏支群出土資料に同文関係が認められる。

資料26と資料1他の複弁蓮華文瓦当は、互いに同一系譜のうちに収まる可能性があるが、たとえば神出窯における出土状況などから、層位的前後関係が確認できた例などはない。

次に軒平瓦については本調査資料2は唐草文系資料であるが、中心飾りを欠いている。しかし子葉の表現に顕著な特徴があり、三葉花文の中心飾りを有する神出古窯址群堂ノ前資料および尊勝寺出土資料236と同文、あるいは同一意匠の関係にあることがわかる。

なお尊勝寺資料9と236については、とともに法勝寺跡出土資料に同範資料が存在する事が指摘されている。本調査資料27も同じく唐草文系資料だが、子葉の表現から第7次資料563・564と同一意匠あるいは同文である可能性が高い。どちらも中心飾りのみの資料だがその端部の表現については、二ツ屋遺跡第4次SD01出土資料（以下仮にH1と番号する）と同一意匠である事から、全体の文様構成が判明する。ちなみにH1資料については、範例から第7次調査資料564と同範であることが確認できる。

ところで、これら樹状中心飾りを有する均整唐草文軒平瓦に関しては、丹治康明の指摘によると、神出古窯址群田井裏支群出土資料にその祖系を求める事ができる。両者は子葉の表現に差異があるが、平瓦の中央を分断する樹状飾りを中心として、唐草によるシンメトリックな構成をとるという意匠の共通性の中で一群を形成する資料として認識できる。

この中心樹状飾りの一群について上原は「播磨の古代寺院から出土」する「古い製作技術による製品」の系譜にある瓦当文様で、「細々ながらも院政期まで伝統を残していた」と位置付けている。現時点で「播磨の古代寺院」がどこを指すかは未確認だが、院政期に創建された日輪寺や同時代の二ツ屋遺跡などの堂塔には、この「古代播磨的」樹状飾りの軒平瓦が葺かれていたことがわかる。

その他中心飾りを欠く資料ではあるが、本調査28資料および二ツ屋遺跡第4次調査資料H3として本書に掲示しているものもこの系譜のなかで理解できる。

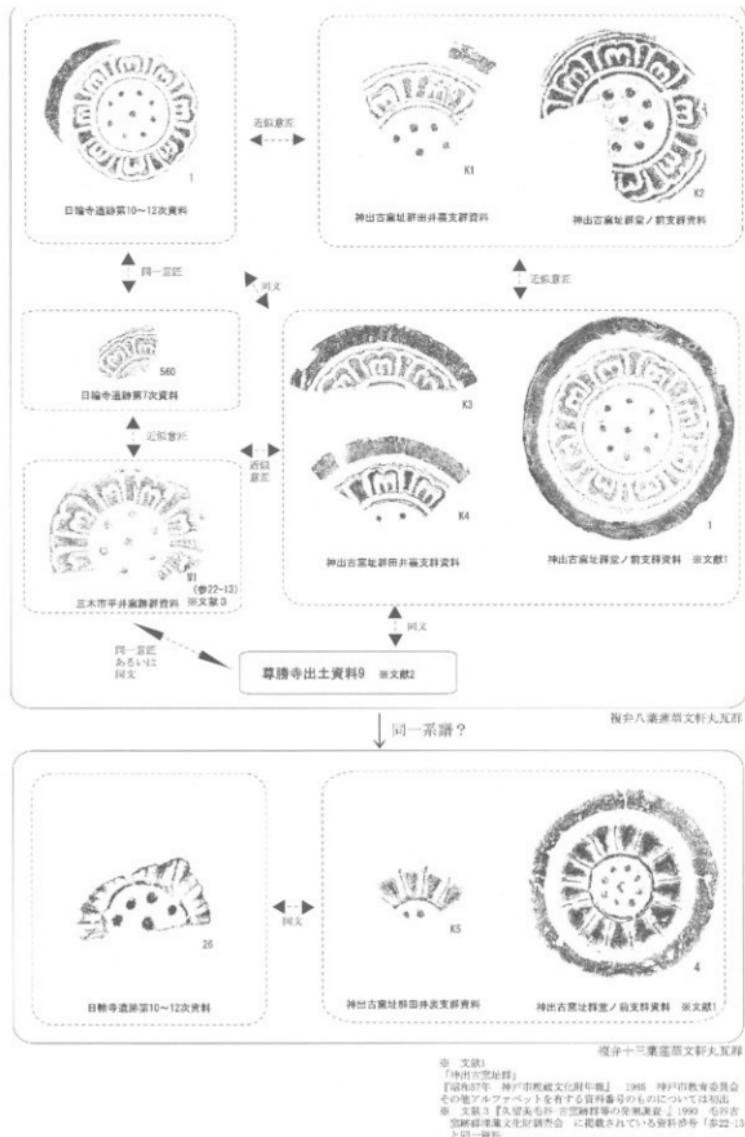


図64 日輪寺遺跡出土軒瓦の系譜関係(1)

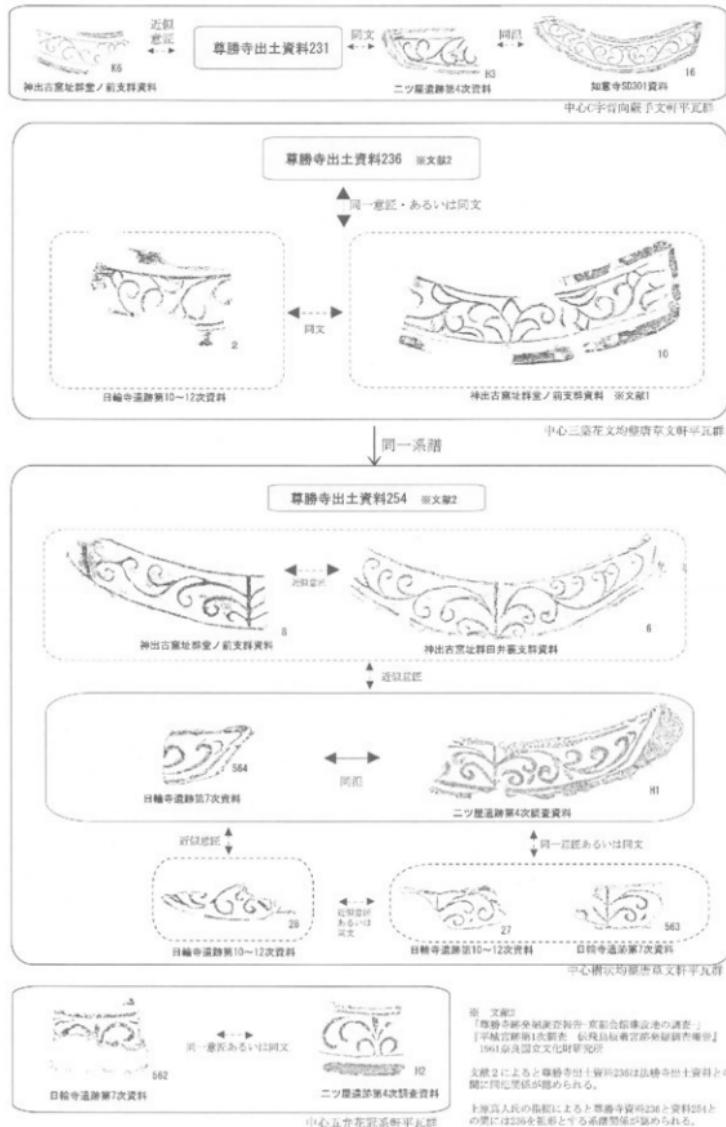


図65 日輪寺遺跡出土軒瓦の系譜関係(1)

国宝番号	瓦	出土遺跡	出土遺構	造形の性格	造形の時期	東播系窯文関係	消費地文関係	同范関係
	板瓦八葉蓮華文軒丸瓦	白水堀跡第4次	SK03	飛白「延命寺」	11世紀前半	神出瓦窯6-堂ノ前8	不明	
H1	中心模彷如意草文軒平瓦	二ツ屋遺跡第4次	SK01	活版瓦蓋譜	12世紀後半	神出瓦窯6-堂ノ前8	尊勝寺資料254-二ツ屋4次	
H2	中心花冠均整草文軒平瓦	*	SK01	持仏堂内土坑	*		562	
H3	中心C字背向蘆支軒平瓦	*	*	*	*	神出堂ノ前支脛16	尊勝寺資料231	16
16	*	如意寺	SI001	塔	12世紀初期	神出堂ノ前支脣16	*	103
561	巴文軒丸瓦	日輪寺遺跡7次	SD01	普光山日輪寺16世紀第1四手平		該当なし	太寺慶寺	
562	中心花冠均整草文軒平瓦	*	*	*	*	*	*	二ツ屋4次
563	中心模彷均整草文軒平瓦	*	*	*	*	神出瓦窯6-堂ノ前8	尊勝寺資料254-二ツ屋4次	
564	*	*	*	*	*	神出瓦窯6-堂ノ前8	*	H1
566	後卉八葉蓮華文軒丸瓦	*	*	*	*	神出瓦窯6-堂ノ前8	尊勝寺資料237	
26	瓶弁三葉蓮華文軒丸瓦	日輪寺遺跡第10~12次(廣徳法師07普光山日輪寺)	16世紀第1調早期	三井善・堂ノ前		不明		
27	中心模彷均整草文軒平瓦	*	*	*	*	神出瓦窯6-堂ノ前8	尊勝寺資料254-二ツ屋4次	
28	*	*	*	*	*	*	*	
2	中心花冠均整草文軒平瓦	*	七境08	燒土坑	12世紀初期	神出堂ノ前支脣10	尊勝寺236瓦式	
1	板瓦八葉蓮華文軒丸瓦	*	*	*	*	神出瓦窯6-堂ノ前8	尊勝寺資料231	

②二ツ屋遺跡第4次調査SD01出土軒平瓦と日輪寺遺跡第7次調査SD01出土新平瓦(資料no.561)、

如意寺SD01出土資料16と二ツ屋遺跡第4次調査SK01出土資料とは泥巻から同範と認められる。

表9 日輪寺遺跡出土軒瓦同文関係

なお第7次資料563は中心五弁花冠の唐草文系資料だが、二ツ屋遺跡第4次調査資料H2として本書に掲載するものが、おそらく同文あるいは近似意匠と考えられる。現時点では花冠の中心飾りに関する資料は神出、尊勝寺資料ともに認められない。その他二ツ屋遺跡第4次調査資料はC字背向の中心飾りで、范傷から如意寺資料との同範関係が判明している。

以上、日輪寺所用の瓦と、二ツ屋遺跡で確認された在地莊園領主とおぼしき人物の邸宅から出土した瓦との間には同範を含む密接な関係性があり、かつそれらは神出古窯址群堂ノ前および田井裏支群生産品と同文関係にあることがわかる。二ツ屋資料はまた如意寺と同範関係の瓦も出土している。さらにこれらは、都における尊勝寺・法勝寺の造寺事業に際して納められた東播系窯瓦とも同文関係にあると指摘できる。

「播磨系瓦屋」の存在については古く今里幾次が指摘し、上原真人が確立した概念であり、東播産瓦と京都における造寺行為とに深い関連性があることは、後に多くの研究者が追隨して語るところでもある。上原の精緻で美しい論考に導かれるように、多くの人が語る神出窯=公権力の介在する窯、という図式であるが、そういった理解の単純化は論者自身の意図せざるところであり「国衙窯」という具体的で理解しやすい要素がやや一人歩きしている感もある。上原自身が指摘するように「播磨系瓦屋と京都諸寺院等との瓦の需給関係は、きわめて複雑な様相を呈する」のが実態であることが、本調査出土の瓦からも読み取れる。

「・・・播磨における特定地域の古窯と京都の特定寺院等とが、同範、同文の軒瓦によって一元的あるいは(安田庄・瓦庄と尊勝寺・蓮華王院という具合に)二元的に結びついていたとは考えられない」のである。

このなかには、尊勝寺の場合のように、創建時の軒瓦と文献における成功記事との対照によって、播磨国衙を仲介とした軒瓦と考え、時期の下る製品を主に一元的あるいは二元的な莊園関係の結果として考えようとしても、尊勝寺比定地内出土の12世紀中葉以降の軒瓦と同文品が、京都の他の寺院などからも多く出土する事実に背反する。要するに、国衙機構を通じた瓦供給や庄園内工房という概念のみでは、京都における播磨系軒瓦の存在形態は説明できないのである。』²²⁾

30年前になされた上原のこの指摘は、ここ播磨において今日なお正鵠を得ていることが、近年の調査によって実証されつつある。日輪寺遺跡、二ツ屋遺跡、如意寺あるいは玉津田中遺跡、白水遺跡というように、明石川流域遺跡のうち属性的に瓦需要が生じるような遺跡からは、私的・公的に拘らず神出古窯址群と同文・同系の瓦が出土する。それは京都での造寺事業に際し奉納された瓦と同文・同系である。このことから神出ほか東播磨産の瓦は、国衙の一元的な管理のもとで中央に供給されるためだけの存在ではなく、在地莊園間交易によって近在に流通していた製品として位置づけられる。

この現象からは東播磨瓦の瓦当文様が、11世紀後半～12世紀初頭に京都における造寺事業を契機として京都系文様の影響を強く受けしていく中で、在地の寺院・居館などへフィードバックされていくという文化現象を読み取ることが出来るだけでなく、神出窯の経営実態ひいては神出莊のありかたそのものへの問いかけとなって返ってくる。

神出莊の前身が神出保であることからも、神出窯における公の関与に疑問の余地はない。しかし近在遺跡からの瓦の出土状況を見るに、12世紀初頭の時点で、神出窯の経営はすでに社会の変容に応じて大きな変化の中にあったと考えられる。上原が説くように、国衙からの一元的な流れでは理解できない人と物の動きを想定することなくしては、明石川流域中世社会の実態を読み解くことは難しい。

今回の調査で出土した丸瓦のうち、I式と分類した横位ナデ成型による玉縁を有する丸瓦に関して、上原は同様の玉縁を尊勝寺資料のうちに見出しており、須恵器工人を大量動員して製作された11世紀から12世紀にかけての播磨特有の瓦と位置づけている。また上原は須恵器工人動員の背景にあるのは、受領成功のための生産拡大であり国衙機構の関与であると指摘するが、一方で「12世紀のある時点で」播磨系瓦屋は国衙支配からの脱却を遂げるとも説いている。

今回行った丸瓦玉縁の調査によって、神出窯から出土するI式玉縁の丸瓦は、11世紀後半から12世紀初頭に稼働していた比較的古い時期の窯体に集中している可能性が高いこと、12世紀中葉以降の窯体からは出土がごくわずかしか見られないことが判明した。(サンプリング作業で得た印象をあえて語るとすれば、12世紀中葉以降、瓦の生産そのものが極端に下降線をたどった可能性さえ感じられる。ただし正確な計量でなく今まで所見による印象ではある)。このことからI式玉縁は11世紀末から12世紀中葉までの50年程度のごく短期間に消長を遂げ、かつ在地・中央の別なく流通していたものと考えられる。今回日輪寺遺跡で出土したI式玉縁を出土した造構の年代も、共伴する須恵器から12世紀初頭を下限とする。ここからも、この時期拡大生産の方向にあっ

た東播系窯の瓦は、莊園間交易のための商品であると同時に、受領の名の下に都へ送られる上納品でもあるという二面性をもつものであることがわかる。さもなければ日輪寺が、あるいは如意寺が、二ツ屋の居館が、公的施設そのものであることになるが、その可能性は極めて低い。

以上の点から、東播系瓦窯に起きた経営形態の変容、上原の言う国衙支配からの脱却は、12世紀の比較的早い段階で開始されていたと見るべきではないだろうか。つまり高階為家の受領成功の背景にあるものは、國司=律令的公的支配ではない。受領による私的な経済活動という、極めて中世的な動きであると考えられる。であれば、東播系窯の多くが瓦陶兼業窯としての姿勢にこだわった理由も理解しやすくなる。

東播系須恵器と呼ばれる商品の数々が西日本の広域に流通し、この地に富をもたらしたことは周知だが、須恵器の収益性と中央への瓦供給力とは、受領とその権力を与えるものとの関係性を支えるために不可欠な両輪ではなかったか。

本郷恵子は地方莊園社会が生み出す富が、院政期の社会においてどのような流れを形作っていったかを「芋粥」の説話になぞらえて語る。「芋粥」は、都の貧しい貴族が越前の受領に招かれて、都で珍重される山芋が腐るほど生えている姿に地方の富を実感するという物語だが、地方の富は地方にあっては富ではない。それを珍重し、消費し、浪費する社会にもたらされたとき初めて富として認識される。その遊び手こそが、受領=すなわち在國司である。彼らは國司の莫大な権益を手に入れるために、こぞって中央への奉仕に邁進した。この在地・在京領主による、中世的二重支配の構造の中に、すでに12世紀初頭の明石川流域社会は、取り込まれていたと見るべきであろう。

本郷は、白河院の発願を契機とする六勝寺の創建は、地方の富が院の権力めあてに都に集中し、その富を蕩尽するため具現したものにはかならないとするが、法勝寺・尊勝寺造営を支えたのはまさに、神出窯を掌中にする播磨守高科為家の受領成功であった。そこにあるのは一元的な生産と供給ではない。都の権力構造と、地方支配者の欲望との、複雑かつループのような相互依存関係が存在する。

これまで播磨=古代律令的支配の長く遺存した地域として、東播系古窯の存在もその流れの中で理解する試みが多くなってきたように思う。確かに文献的には公領とされる支配地の多い土地納であるかもしれない。しかし播磨のうちでも、こと明石川流域に関しては、果たして本当にそうだろうか？

12世紀初頭の明石川流域では、莊園社会の深化を背景とした活発な経済活動に突き動かされるように、富と権力の往還が行われていたことが、寺院の消長と瓦消費の姿からは読み取れる。前節でみたような、この時期この地に突如として起こる活発な造寺行為とは、その環の申し子であり、今日なおこの地に法燈を絶やさぬ多くの顯密寺院誕生の所以と、神出窯群の繁栄とは、明石川流域中世世界の幕開けを告げる象徴的現象として捉えられはしないか。

その膨大な資料数の前に、未だ未公開のものも多いが、近在における生産瓦の分布範囲の解明をはじめとして、今後東播系窯址出土資料の解明がより進み、改めてその真価が世に問われる日

が訪れたとき、今回の調査で得られた成果も、さらに深遠な物語を語ってくれるのではないかと期待される。

12世紀初頭の明石川流域では、須恵器のみならず瓦の流通においても、供給形態は多様であることが今回明らかとなった。瓦は上器と異なり需要が限定されること、重量物であり広域な流通に不向きであることなど様々な要素も絡み合っていたと想像される。それらを超えてなお中央における瓦供給の中に東播産瓦が存在したことをどう評価するかこそが、資料の増加した現在の課題であろう。

前節と合わせて、ここまでは主に12世紀を中心とした、日輪寺創建時の明石川流域の社会について考察してきた。その後の日輪寺をとりまく環境については、今回調査で出土した14世紀から16世紀までの土器・陶磁器がある程度のことを物語っていると考えられるため、最後に少しだけ言及しておこう。

今回の調査で出土した当該時期の上器・陶磁器は図66のような構成をとっている。本調査地だけでの計量分析的な手法はその有効性に疑問があるため、あえて行わない。その上でこの構成の持つ意味について考察していくとすれば、そこにあるものを多様と認めるかどうかという問題に尽きるかもしれない。

上器の構成からは東播系須恵器・土師質土器といった在地系土器とともに備前焼・古瀬戸・青磁などが共存し、他産地系陶磁器の生活への浸透が伺える。また東播系須恵器の膝元でありながら、擂鉢の消費に関しては、量的には東播系・備前が拮抗していることもすでに述べた。

こね鉢的な用途から出発したであろう東播系須恵器鉢の最終形態が、魚住窯産を主体とする、ハケ目＝擂目を施したものに変化することから、より擂鉢としての機能を強化する方向へ、備前焼との競争力を意識したものに進化しようとしていたことも指摘した。そこからは備前焼という新興商品との競合の中で、試行錯誤し苦闘する東播系窯終焉の姿が垣間見える。

煮炊具	食器	調理具	貯蔵具
・ぼうらく型（土師質土器）	・小皿・皿（土師質土器） ・鉢（須恵器） ・碗（須恵器） ・碗（青磁） ・水差（古瀬戸） ・平底（古瀬戸）	・片口鉢（須恵器） ・擂鉢（土師質土器） ・擂鉢（備前焼）	・壺（須恵器） ・瓶（須恵器）
・鍋型（土師質土器）			
・焼型（土師質土器）			
・羽釜型（土師質土器）			

図66 日輪寺遺跡第10～12次調査出土中世土器の器種構成

しかしこういった断片以外に、出土遺物全体におけるほうらくの量的優勢の持つ意味は何か？古瀬戸の存在をどう評価するか？15～16世紀の出土遺物全体を見渡したとき、その構成は普遍的なものなのかな？標準を外れた個性が存在するのか？といった全体的な疑問は、周辺集落との比較や、それを超えた地域間の比較を通してはじめて解決されていく。残念なことに、中世明石川流域における中世土器・陶磁器資料の分析・研究はまだ端緒であり、比較できる資料は多く公開されていない。

日輪寺遺跡を含め、11世紀から12世紀にかけて成熟を見、その後太山寺に代表されるような中世荘園社会を展開してきたであろう明石川流域の個性を浮き彫りにするためには、第3章で述べたように、たとえば兵庫津遺跡のような貨幣経済先進地との出土遺物の比較などが特に有効ではないだろうか。この問題についても、やはり別の機会を待たざるを得ない。

今回の調査を通して、私たちは明石川流域に広がる広大な中世遺跡群の実態を解き明かすパズルピースのひとつを手に入れた。パズルを完成させるためには、この先も一つ一つの遺跡と真摯に向かい合い、それぞれの資料が語る事實を丁寧に接ぎ合わせていくしかない。数千年の時をかけて祖先が紡いだものを復元するには、膨大な手間と時間が必要だろう。一つの謎が解き明かされれば、また新たな謎が生まれるかもしれない。果てしのない問い合わせと答えの繰り返し。

しかしやがていくつかのピースが重なり合った時、ほんやりとではあるが、文献に残された断片とはまた異なる、誰も知らなかつた中世絵巻の図柄が浮かび上がってくる。しだいにそれがはつきりとした輪郭を持ち、いくつか瑞々しい中世びとの姿となって描き出された時、私たちはそこに既成概念をはるかに超える、多様で多彩なふるさとの姿を見ることになるだろう。そのとき遺跡は人々の心に訴えかける力をもった文化財となり、私たちのよって立つ地域を豊かにする原動力となる。

今回の調査で私たちが手に入れたのは、明石川流域という広い範囲の中の、ごく小さな点ではあるが、同時に無限の可能性をもつたひとかけらであり、得がたい地域の財産でもあることを確認して、本書の文末としたい。

《追記》

本書の作成にあたり、丸山潔、丹治康明、黒田恭正、安田滋の四名よりそれぞれに多くの指導と教示を得た。また神出古窯址群茶山支群の資料について、調査を担当した中村善則氏から教示と参考資料の提供を受け、保管者である神戸市立博物館の協力を得て資料を実見することができた。さらに堂ノ前支群・田井裏支群および三木市平井窯跡群に関する資料は丹治作成の拓本を、二ツ屋遺跡第4次調査に関する資料は黒田作成の拓本を使用した。拙い論考であるが、明石川流域遺跡の歴史に関わったこれら多くの先達の情熱があつてこそ、本書がはじめて成り立ったことを特にここに記すものである。

《注》

- (1)『日輪寺遺跡発掘調査報告書』日輪寺 第4次～7次調査 2002 神戸市教育委員会
- (2)黒田義隆 編『明石市史資料第5集 古代・中世編』1985 明石市教育委員会
- (3)野地繁左「旧清道跡の建築史的考察」『攝津旧清道跡 発掘調査報告』宝塚市文化財調査報告第5集 1973 宝塚市教育委員会・旧清道跡発掘調査団
- (4)長谷川賢二「頼密仏教と地方寺院」『季刊考古学第97号 中世寺院の多様性』2006 雄山閣
- (5)黒田 公「兵庫県の莊園制」『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』1982 兵庫県教育委員会
および独立行政法人 歴史民俗博物館 データベースれきはく1 「日本莊園」
<http://www.rekihakaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>
- (6)『白水遺跡第3・6・7次 高津堀大塚遺跡 第1・2次発掘調査報告』2000 神戸市教育委員会
- (7)『神戸市西区 太山寺坊院跡発掘調査報告』1984 阪神高速道路公社・財團法人古代学協会 平安博物館
- (8) (7)に同じ
- (9)「頭高山遺跡第7次」「頭高山遺跡第8次」「平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報」
1999 神戸市教育委員会
- (10)『二ツ原遺跡』『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』1995 神戸市教育委員会
- (11)『玉津川中遺跡 第6分冊』兵庫縣文化財調査報告 第135-6冊 兵庫県教育委員会
- (12)「如意寺跡」『昭和五十七年度神戸市文化財年報』1985 神戸市教育委員会
- (13)『松本遺跡・脇野遺跡』『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』1998 神戸市教育委員会
- (14)『白水遺跡 第3・6・7次 高津堀大塚遺跡 第1・2次 発掘調査報告書』
2000 神戸市教育委員会
- (15)『白水遺跡 第4次』1999 神戸市教育委員会
- (16)黒田 公「兵庫県の莊園制」『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』1982 兵庫県教育委員会
- (17)間屋 真一「太山寺の歴史」『特別展 太山寺の名文展』展示図録 1993 神戸市立博物館
- (18)上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号 1978
元興寺文化財研究所考古学研究室
- (19)『神山古窯址群』『昭和五十七年度神戸市文化財年報』1985 神戸市教育委員会
- (20)丹治康明の教示による
- (21)『尊勝寺跡発掘調査報告－京都会館建設地の調査－』『平城宮跡第1時調査 伝飛鳥板蓋官跡発掘調査報告』
1961 奈良国立文化財研究所
- (22) (18)に同じ

《参考文献》

- 浅岡 俊夫「六甲山周辺の山岳寺院」『仏教藝術265号』 2002 毎日新聞社
 本郷 恵子「京・鎌倉 ふたつの干椎」日本の歴史 六 院政から鎌倉時代 2008 小学館
 伊藤 正敏「寺社勢力の中世－無縁・有縁・移民」2008 犀文堂
 黒田 俊雄「寺社勢力」 1980 岩波書店

写 真 図 版



写真1 調査地全景 北から



写真2 調査地南半 溝状遺構07(手前)竪穴建物04(中央)SX01(右) 北東から



写真3 竪穴建物04(右) 竪穴建物05(左) 北から



写真4 竪穴建物04 北東から



写真5 積穴建物04中央土坑周辺土器出土状況 北東から



写真6 積穴建物04中央土坑周辺土器出土状況 北から

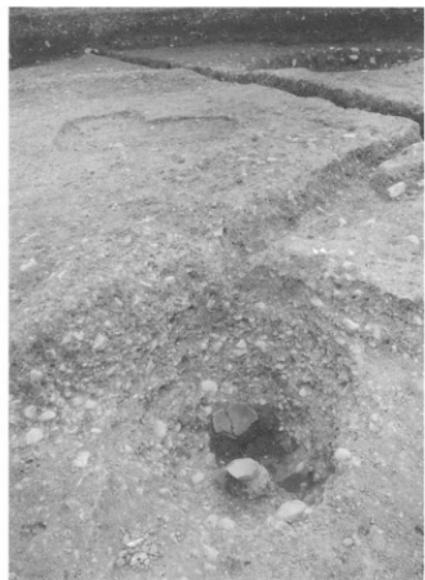


写真7 積穴建物04土坑1 土器出土状況 北から



写真8 積穴建物05 北東から



写真9 積穴建物04(左)SX01(右) 北東から



写真10 SX01 北東から



写真11 SX01土器出土状況 南東から



写真12 積穴建物01 南西から



写真13 溝状遺構07 北東から



写真14 溝状遺構07 北から



写真15 調査地全景 北東から
豎穴建物02(中央左) SX05(中央右) SX02(手前奥) SX03(手前) SX04(奥)



写真16 調査地北半 南東から



写真17 溝状遺構01・02・03(奥右から) SX03(手前)

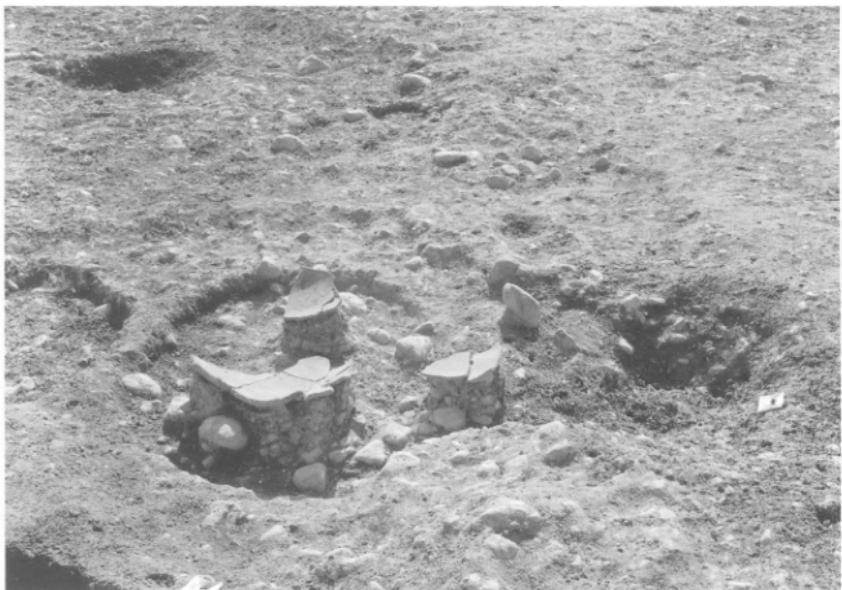


写真18 土坑19土器出土状況 東から



写真19 溝状造構03(奥) SX03(手前) 東から



写真20 調査地全景 南西から



写真21 穹穴建物04出土弥生土器 鉢



写真25 SX01出土弥生土器 外反口縁鉢



写真22 穹穴建物04出土弥生土器 小型壺



写真26 SX01出土弥生土器 高环



写真23 穹穴建物04出土弥生土器 小型壺



写真24 穹穴建物04出土弥生土器 小型壺

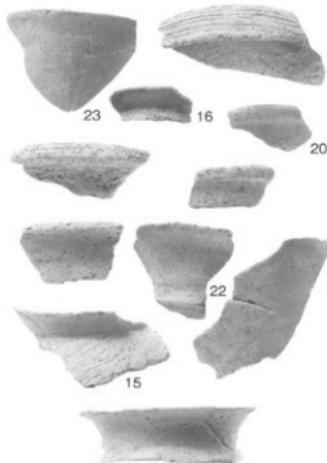


写真27 穹穴建物04出土弥生土器

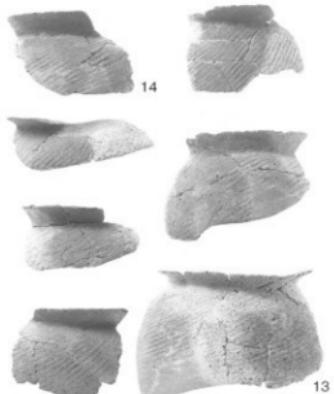


写真28 竪穴建物04 中央土坑出土弥生土器 壺

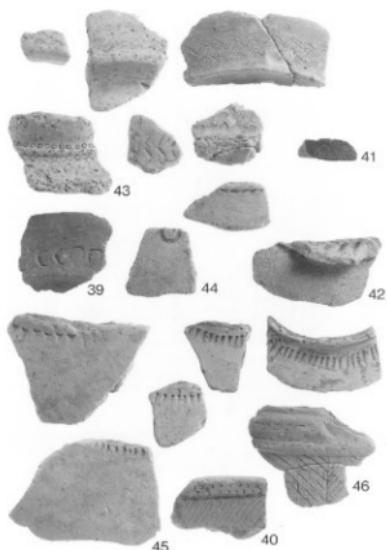


写真31 竪穴建物04他出土 施文弥生土器

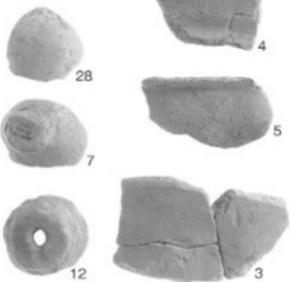


写真29 竪穴建物01-02出土弥生土器



写真30 土坑09出土弥生土器 壺

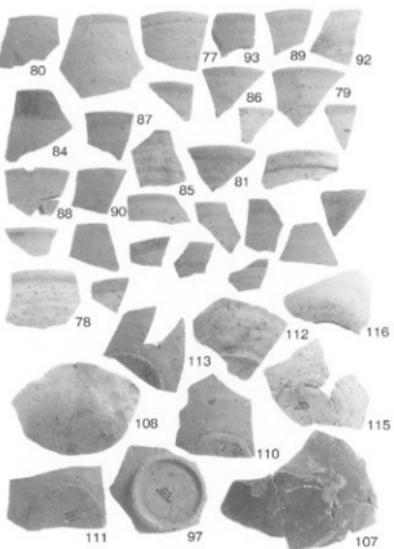


写真32 土坑08出土須恵器 壺

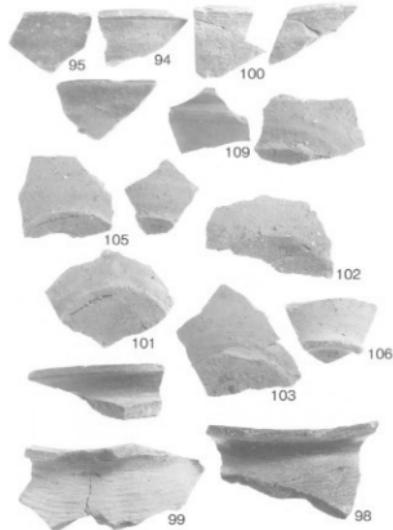


写真33 土坑08出土須恵器 鉢および甕



写真34 SX04出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型



写真35 SX04出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型



写真36 SK19出土土師質土器 煮炊具・羽釜型

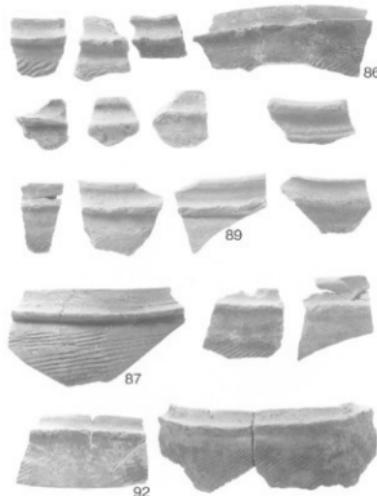


写真37 溝状遺構07出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

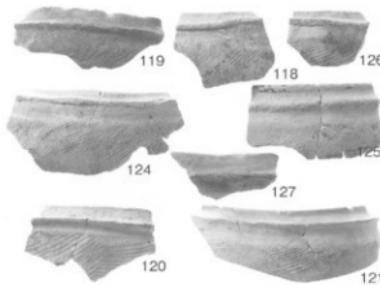


写真38 SX02出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型



122



178

写真42 SX05出土土師質土器 煮炊具・はうらく型



123

写真39 SX02出土土師質土器 煮炊具・はうらく型



142

写真40 SX03出土土師質土器 煮炊具・はうらく型



180



180



180

写真41 SX04出土土師質土器 煮炊具・はうらく型

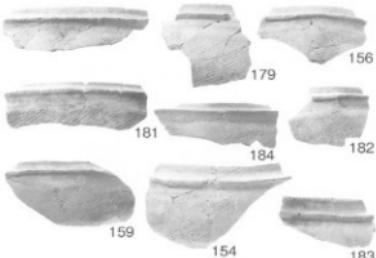


写真43 SX04・05出土土師質土器 煮炊具・はうらく型

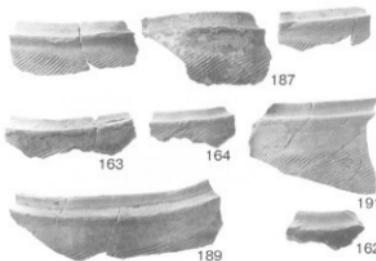


写真44 SX04・05出土土師質土器 煮炊具・はうらく型

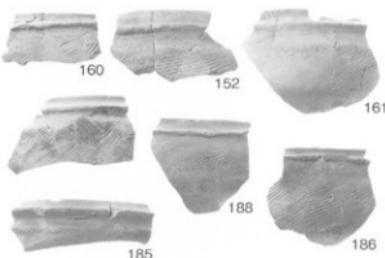


写真45 SX04・05出土土師質土器 煮炊具・はうらく型

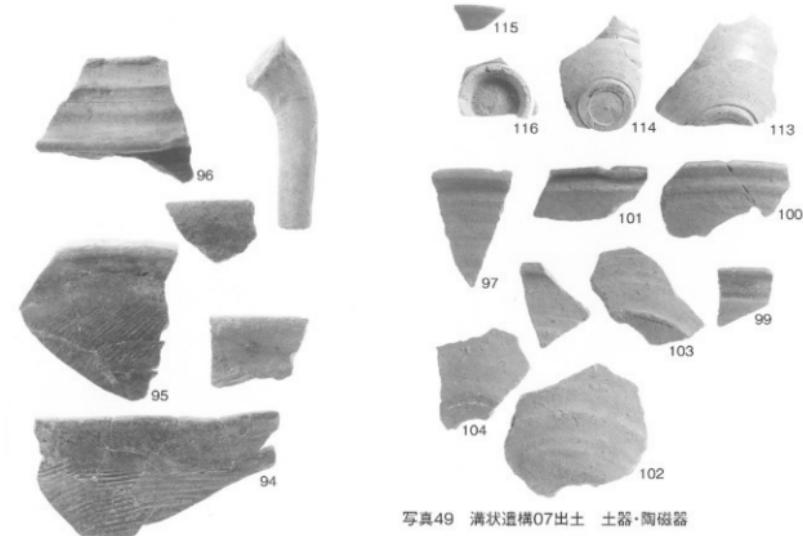


写真49 満状遺構07出土 土器・陶磁器

写真46 満状遺構07出土土師質土器 その他煮炊具



写真47 SX02出土土師質土器 煮炊具・なべ型

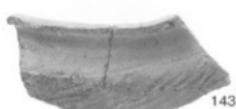
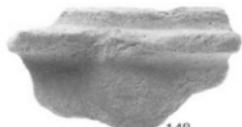


写真48 SX03出土土師質土器 その他煮炊具



写真50 SX03出土僅前焼 鑊

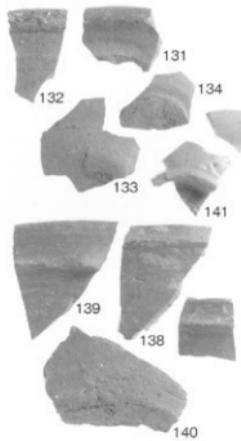


写真51 SX03出土 土器・陶磁器

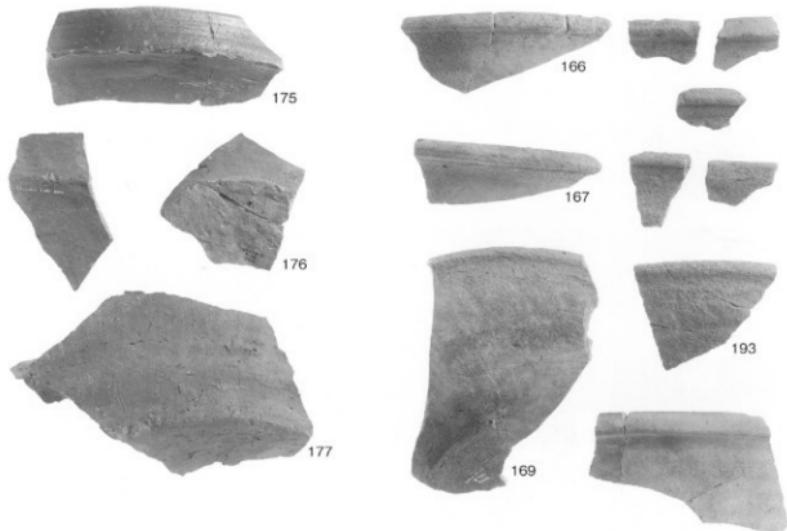


写真52 SX04出土 備前焼

写真54 SX04・05出土 東播系須恵器 鉢

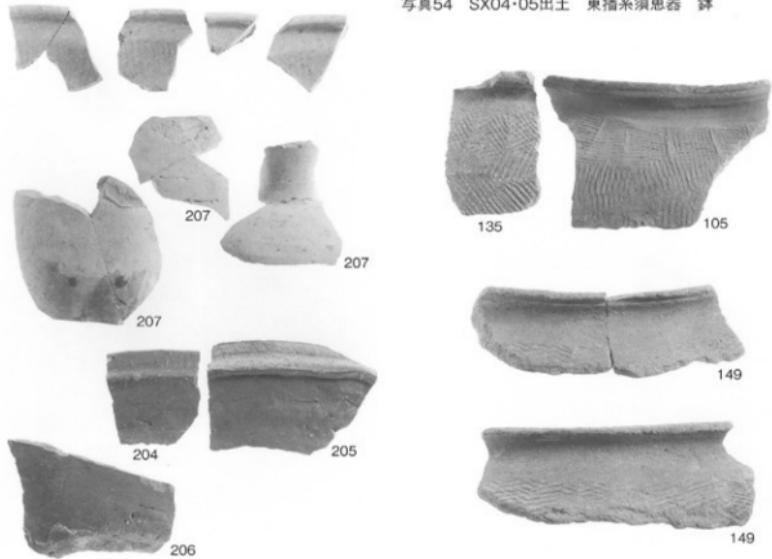


写真53 SX05出土 青磁・小瀬戸・備前焼

写真55 溝状遺構07・SX02・03出土 東播系須恵器 鉢

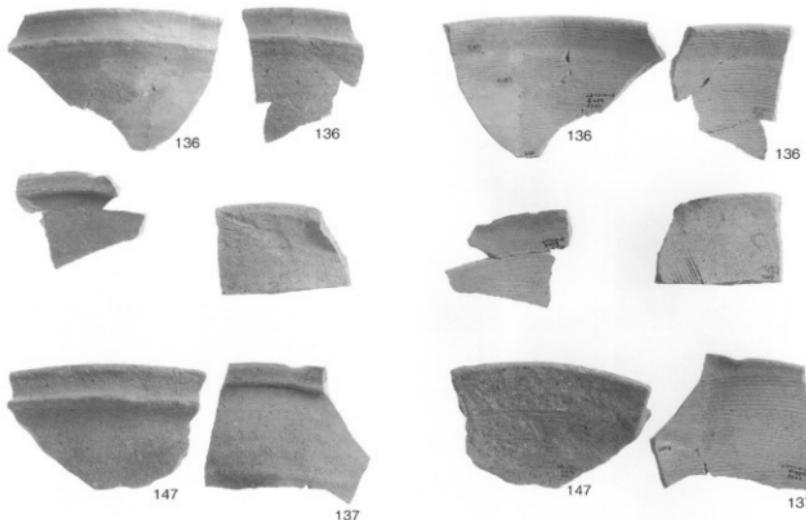


写真56 溝状造構07・SX02・03出土 土師質土器 撞鉢外面 写真57 溝状造構07・SX02・03出土 土師質土器 撞鉢内面



写真59 SP27出土 磚石石材 背面



208

写真60 土坑08出土 複葉八弁蓮華文軒丸瓦瓦当面



写真61 同左 裏面



225

写真62 SX05出土 二次的焼成痕のある軒丸瓦瓦当



写真63 溝状遺構07出土 複葉十三弁蓮華文軒丸瓦



209

写真64 土坑08出土 中心三葉花弁均整唐草文軒平瓦瓦当



227

写真65 溝状遺構07出土 中心樹状均整唐草文軒平瓦瓦当



写真66 第7次調査出土 軒平瓦瓦当(范傷)



写真67 ニツ屋遺跡第4次調査出土 軒平瓦瓦当(564)と同范



写真68 満状遺構07出土軒平瓦
226凹面調整(上左)

写真69 同 凸面調整(上右)

写真70 同 瓦当面

226

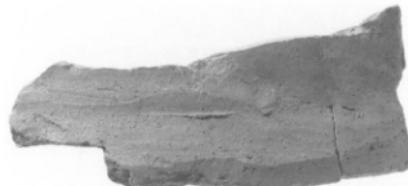
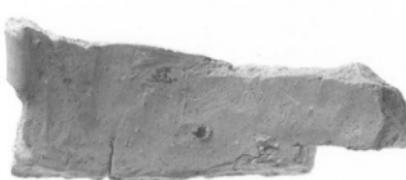


写真71 満状遺構07出土軒平瓦227
凹面調整(上左)

写真72 同 凸面調整(上右)

写真73 同 瓦当面

227





写真74 土坑08出土 軒平瓦210 平瓦部凹面調整



写真75 同左 凸面調整

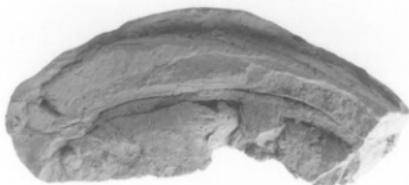


写真76 土坑08出土軒丸瓦211凹面調整(上左)

写真77 同 凸面調整(上右)

写真78 同 瓦当面接合痕 包み込み式



写真79 土坑08出土 平瓦213 凹面調整



写真80 同左 凸面調整(印斜格子叩き目)



写真81 土坑08出土 平瓦214 凹面調整(コビキ痕)

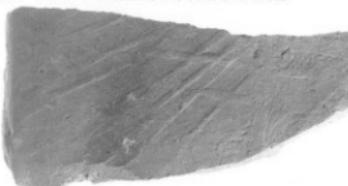


写真82 同左 凸面調整(斜格子叩き目)

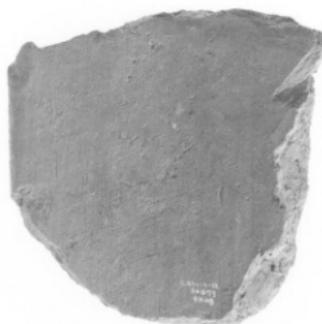


写真83 土坑08出土 平瓦215 凹面調整



写真84 同左 凸面調整(平行叩き目・楕円均等)



写真85 土坑08出土 平瓦217 凹面調整



写真86 同左 凸面調整(縦位ナデすり消し)



写真87 土坑08出土 平瓦218 凹面調整



写真88 同左 凸面調整(縦位ナデ)



写真89 土坑08出土 平瓦219 凹面調整



写真90 同左 凸面調整(平行叩き目のち不定方向ナデ)



写真91 土坑08出土 平瓦220 凹面調整



写真92 同左 凸面調整(平行叩き目のち不定方向ナデ)



写真93 土坑08出土 丸瓦221 凸面調整(斜格子叩き目)



写真94 同左 凸面調整



写真95 土坑08出土 丸瓦玉縁部223 凸面(玉縁I-a式)



写真96 同左 凸面調整



写真97 满状造構07出土 平瓦231 凹面調整



写真98 同左 凸面調整(平行叩き目・縄目不均等)

報 告 書 抄 錄

日輪寺遺跡 発掘調査報告書

-第10・11・12次調査-

2009年3月31日

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480
印刷 デジタルグラフィック㈱
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000